週刊現代 56巻36号 2014年10月25日号

リレー読書日記

大嘘つきのオンパレード！なぜ人はいつかばれるのに自らを偽ってしまうのか？

嘘をつくのは人間の本性ですから、どのように嘘をつくのかが腕の見せどころになる。夫婦だって死ぬまで「愛してます」と嘘をつくところに妙味があり、妻にさえ正体を知られていなかったニセモノの大富豪もいた。ニセ医者、ニセ王様、年齢、職業、学歴、血統の詐称など、この世は嘘と虚構でできている。

『**詐欺と詐称の大百科**』には八十名以上の大嘘つき（詐称者）が登場する。ロックフェラー家の一員と詐称していたクラーク・ロックフェラーはドイツ生まれ、観光ビザでアメリカに入国してアメリカ娘と結婚した。グリーンカードを入手すると結婚の翌日に彼女と別れ、別のアメリカ女性と結婚して、あとはやりたい放題。クラーク・ロックフェラーが自分の娘を誘拐して逮捕されたとき、妻は警官に「この人は、一体誰なんですか？」と質問した。

大富豪カーネギーの私生児を詐称した女は、カーネギーの没後に四億ドルを相続すると嘘をつき、銀行から多額の融資を受けた。大金をつかって年がら年じゅう客を集め、「オハイオ州の女王」と呼ばれたが、化けの皮がはがされて刑務所に投獄されて五〇歳で死んでしまった。

いつかばれるのに詐称してしまうところが人間のさがなんでしょうか。ここに登場するのは正体がばれた連中で、なかには一生ばれなかった人もいるはずだ。

この本に登場する詐称者をいくつかあげると、性別変換者たち、尼僧大尉（男を詐称したオテンバ娘）、平民君主（インドの君主を詐称した平民）、偽ドミトリーたち（ロシアのイヴァン四世の継承者を自称）、エッフェル塔を売った男（フランスの政府高官になりすました）。

なかでもエロいのはジャワの王女になりすまして、フランスとドイツの二重スパイをしていた踊り子マタ・ハリ。マレー語で「日の眼」を意味するマタ・ハリは、逮捕されるとわずか二日間の裁判で死刑を宣告されて銃殺された。

外交官や銀行家、将校たちと密通を重ねたマタ・ハリは男たちを一瞬でとりこんでしまう魅惑的な女でした。マタ・ハリと密通したかったなあ。

『**石の虚塔**』は「神の手」を持つといわれた藤村新一の旧石器発掘捏造事件を追った迫真の力作。藤村新一の発掘捏造はいかなる情況のなかでおきたのか。

そもそもは岩宿で相澤忠洋が黒く尖った石片を見つけたことにはじまる。日本に旧石器時代があったことが明らかになった画期的な発見。相澤氏は働きながら尋常小学校夜間部を卒業し、兵役についた後は群馬県桐生で行商をしていた「考古ボーイ」だった。

相澤の発見を学術的に論文化したのは芹沢長介であった。芹沢は民藝運動で有名な染色家芹沢銈介の息子で、土門拳に弟子入りして写真家として修業した異色の研究家だった。

考古学の学者は明治大学の杉原荘介をはじめとして群雄カッキョしていたが、岩宿遺跡の発見を相澤忠洋の業績として評価したのは芹沢（明治大から東北大）で、以後、芹沢と相澤のコンビが始まった。

寺山修司が編集した文芸誌を新発見

そのうち藤村新一という考古ボーイが出現して、つぎつぎと数十万年前の地層から旧石器を発見して、第二の相澤忠洋となったが、二〇〇〇年に捏造であることがばれた。

この事件により藤村を認めていた芹沢長介も批判され、考古学への信頼がガタ落ちして「考古学はバクチか」と揶揄された。

『石の虚塔』はその検証である。藤村は、捏造発覚から一年後、精神科に入院中の二〇〇一年、罪の意識から右手の人差指と中指を、自ら切断した。病院の裏山の切り株に手を置いて、ナタを振り下ろし、中指はまだ肉と皮とがついてぶらーんとしていたから、ノコギリみたいにギーコギーコと切り落とした。人差指は自分を慕ってくれた考古ボーイたちに詫びるため、中指は芹沢先生に詫びるため。

上原善広氏はこの一冊を刊行するために格闘し、編集担当者もさぞかし苦労しただろうと察する。私は、編集者となった五〇年前、相澤忠洋氏と芹沢長介氏を編集部に呼んで話を聞いたことを思い出した。

『**編集少年　寺山修司**』は寺山氏の中学時代の「学級新聞」、高校時代の「生徒会誌」、新発見の文芸誌「白鳥」などを記録し、寺山修司の編集少年ぶりを克明に調べた労作である。

そうなのだ。私は寺山氏より六歳若いが、やはり編集少年で、中学二年より小説を書き、文芸誌を編集していた。私の世代の作家や編集者は、中学生のころよりの編集小僧が多い。

寺山氏は一九四八年、青森県古間木中学校に入学して「週刊古中」を一人で発行した。翌年、野脇中学校に転校し「2年9組学級新聞」や文芸誌「白鳥」を発行した。一九五一年、青森高校に入学して「『咲耶姫』殉情歌集」（自筆ペン書き）。「学級新聞」（三年六組）に「第一号の新聞がおくれて発行したことをおわびします」とある。新聞や文芸誌は「おくれて発行した」ことをおわびするのが定番でした。だれにもおわびする必要はないのにね。

文芸誌「白鳥」の編集後記には「本誌には読み難い所や誤りがありますが大目に見て下さい」。

短歌はバッグンの腕だが俳句もなかなかで、「叱られて納屋の木の間の月見かな」「峠道サーカス行くや雲の峯」「便所より青空見えて啄木忌」など、寺山調の萌芽がみられる。

筆者の久慈きみ代さん（青森大学社会学部教授）は、寺山氏と青森高校の同期の級友のおかげで文芸誌「白鳥」が発見された、という。

寺山氏を看取った医師庭瀬康二氏（谷川俊太郎氏の従兄弟）は私の主治医でもあって、庭瀬氏の葬儀の日、北鎌倉駅から寺へ行く道で、寺山夫人の九條今日子さんと一緒になった。

私は寺山修司の声帯模写を得意としていたので、歩きながら寺山氏の口調で「ぼくは九條さんを永遠の女神と思っております。元気でお過し下さい」と伝えておきました。

『詐欺と詐称の大百科』
イアン・グレイアム著
松田和也訳
青土社／2800円

今回の3冊

『石の虚塔
発見と捏造、
考古学に憑かれた男たち』
上原善広著
新潮社／1500円

『編集少年　寺山修司』
久慈きみ代著
論創社／3800円

嵐山光三郎
Arashiyama Kozaburo

この欄は嵐山光三郎氏、山岸舞彩氏、溝口敦氏によるリレー連載です。嵐山氏の「読書日記」は最終回となります

あらしやま・こうざぶろう／作家。'42年、静岡県生まれ。雑誌編集者を経て、作家活動に入る。'88年『素人庖丁記』で講談社エッセイ賞、『悪党芭蕉』で'06年に泉鏡花文学賞、'07年に読売文学賞を受賞。近著に『年をとったら驚いた！』

震災の教訓をいかす基金を。

東日本大震災の最大の教訓。
それは、災害対策は
起きてからでは遅いということ。
大災害が起きたとき、
まっ先に動くための支援金を
蓄える仕組みが必要です。
あの震災で学んだことを、
未来のために。

お金の使いみち
ボランティア・NPOの緊急活動支援 など

支援金の寄付を募っています。
＜災害復興支援特別基金＞
銀行名：三菱東京UFJ銀行
支店名：本店
預金種別：普通
口座番号：1660782
口座名（漢字）：公益財団法人日本財団
口座名（カナ）：ザイ）ニッポンザイダン
お問い合わせ先：03-6229-5111

日本財団
THE NIPPON FOUNDATION